



会員寄稿

「届く言葉・届ける言葉」

人権・同和教育課 三好 章子

私と生成 AI の最初の勝負は、今年3月。長男の小学校の卒業式で、夫が読み上げる祝詞（の代筆）を巡るものである。試しに生成 AI に祝詞を作ってもらったのだが、あまりにスマートな仕上がりに、これでは感謝の気持ちがまったく伝わらない！と奮起した私は、一晩かけて先生方への感謝の気持ちや卒業生へのエールを込めた祝詞を作り上げた。しかし、翌朝、夫はこう言った。

夫 「うーん、なんか独特すぎん？もっとフツウの祝詞に書きなおして。」

私 「ああ？そんなに普通が良ければ自分で書くか、生成 AI 様の書いた祝詞を読み上げたら？」

結局、夫はそのどちらの方策も取らず、私の書いた祝詞をたどたどしく読んだようだ。そして、卒業式に参加しなかった私は、ママ友たちから「卒業式の祝詞、章子さんが書いたやろ～ウケる～」 「あのわざとらしさが章子流w」といった、褒めているのか貶しているのか分からないメッセージを受け取った。ただ、卒業式の夜、担任の先生から「祝詞、私の心にグサグサ刺さりました」というメッセージをいただき、その時「私は生成 AI に勝った！」と思ったのだ。

とはいえ、近い将来、私は生成 AI に負けるだろう。そう確信せざるを得ないほど生成 AI は優秀だ。若き同僚が生成 AI を颯爽と使いこなし、歌まで作らせているのを見る度に、自分は古い人間なのだと思うされる。そして、想像する。それほど遠くないうちに、思考し、書くという行為が時代遅れなものとして淘汰される時が来るのではないか。読書感想文が、古文や漢文がなくなる時代が来るのではないか。だとしたら、私たち国語科の教師は、何のために言葉を、書くことを、教えていけばよいのだろうか。

それでも、私にとって「書くこと」や「言葉」というものは、生成 AI に取って替わるものではないのだ。というのも、この15年間、三人の子どもを育てていく中で、私は喜怒哀楽の枠を超えた様々な感情に翻弄されることになった。描いた通りにいかない育児、自分に対する情けなさ、忸怩たる思い。子育て中、どうしてもなく自分のことを嫌いになりそうな時、私はいつも誰かからの言葉を思い出してきた。誰かの言葉に救われてきた。家族や同僚からもらった励ましを、ママ友たちとの SNS でのやり取りを、担任の先生方がお忙しい中、連絡帳に記してくれた言葉を。確かに、私たちの言葉は生成 AI の言葉よりも非論理的で、非効率で、しかも拙い。でも、言葉が人の心を動かすことができるのだとしたら、そこに相手がいって、相手のことを思いながら、言葉を「届ける」ことができるからだと思ふ。だから、国語の授業で将来、使わないであろう古文や漢文を学ぶのは、時空を超えた他者が届けてくれた言葉を受け取るためだし、読書感想文は本の中から届けられた言葉を、自分との対話によって深めていくためのもの。そういう拘りを持って、生徒たちと共に言葉を紡いでゆける教師でありたいと思っている。

さて、もうすぐ多くの3年生が進学先に提出する志望理由書を書く時期がやってくる。数年前、小論文対策講座に参加し、「志望理由書は大学へのラブレター」という言葉にああ、なるほどと思った記憶がある。ところが、今や、生成 AI を使えば、ラブレターは瞬間的に量産できる。確かに楽だ、でも、これで良いのだろうか。生成 AI を使いこなす同僚曰く、「どれだけ整った志望理由書を提出したとしても、話す言葉に具体性がなければ、大学側に見抜かれるよ。」とのこと。「ここで学びたい」その思いを「届ける」言葉を、この秋、一緒に練り上げていきたいですね。

